

ムがハンブシャーの田舎にやってきたのは、あまりの放蕩ぶりに生活の面倒をみてやってきた大祖父の判事ラングロイス（イアン・リチャードソン）が堪忍袋の緒を切らしたためだが、そんなトムは結構ハンサムで知的。ラングロイス判事は堅物だが、法律を勉強している若者としてはあまりカチカチ頭にならず、トムのようにあちこち寄り道して遊び呆けることも必要だ。そんなトムに一方では反発しながらジェインがいろいろと刺激を受け、結局互いに惹かれていったのは当然だろう。

他方、ジェインの両親にとっての理想的なお相手は地元の名士で大きなお屋敷に住む財産家グレシャム夫人（マギー・スミス）の甥のウィスリー（ローレンス・フォックス）。たしかにウィスリーは誠実そうな紳士だが、ダンスも運動もダメ。おまけにトムに比べると頭も悪そうだから、小説を書くことに夢中で、愛のために結婚すると考えているジェインにとっては全然お呼びじゃないお相手。本作は8人兄弟の7番目の子供として1775年に生まれたジェインが、トムとウィスリーのどちらを選ぶのかという葛藤を描く映画。そんな視点で観ると、そりゃトムの方が魅力的だが、ウィスリーには家柄とカネが。さて、彼女のそして両親の選択は？

小説家には体験が必要？トム・ジョーンズも必要？

田舎娘ながらジェインの書く文章には周りのみんなが絶賛していたから、ジェインの朗読にケチをつけたトムはジェインにとっては許しがたい男。しかし冷静に考えてみれば、恋愛小説を書くにはその体験が必要だというトムの主張もごもっとも。現に小説家には、檀一雄のような無頼作家、吉行淳之介のような遊び人、芥川龍之介のような自殺願望者など、一言で言えば性格破綻者（？）がたくさんいるから、ジェインのように真面目で優秀なだけでは恋愛小説の名作を書くのはとても無理？そうかといって、ロンドンで好き放題遊び回っていたトムと違い、ハンブシャーのような田舎で、しかも女性のジェインが体験できることは限られている。

そこで、トムがジェインに対して勧めたのが『トム・ジョーンズ』。そう聞いて「ああなるほど」と思える人はかなりの文学通。これは1749年に発表されたイギリスの小説家ヘンリー・フィールディング作の『トム・ジョーンズ』のことで、私は大学時代に文庫本全4巻を一気に読んだことがあるメチャ面白い小説。またそれを映画化した『トム・ジョーンズの華麗な冒険』（63年）もメチャ面白い映画だった。何が面白いかというと、それは主人公トム・ジョーンズの女性遍歴の冒険の旅が面白いわけだから、それは基本的に男性目線。したがって女性のジェインが読んで面白いかどうかは話が別だが、あの当時としてはかなりエッチな恋愛小説『トム・ジョーンズ』にジェインも惹かれたようだから、さすがジェインの感受性は良好。これくらいの感受性があれば、恋愛やキスや男性遍歴の体験を重ねなくても、頭の中の理解だけで十分恋愛小説の名作が書けるはず。

駆け落ちの決断とその利害得失は？

「駆け落ち」という言葉がいつ頃生まれ、いつ頃市民権を得たのかは知らないが、18世紀末のイギリスで駆け落ちという言葉があったことにビックリ。私の友人にも「娘が駆け落ちした」という不幸な人(?)が何人かいるように、今では駆け落ちは日常茶飯事(?)だが、あの時代にトムとジェインが駆け落ちを決意し実行するのはかなりの決断が必要なものだ。もっとも、本作ではその前段階としてトムがジェインをロンドンへ連れていき、大叔父のラングロイス判事に紹介して結婚を認めさせようとする策略が面白い。まだ若いのに知的なトムがいかにも思いつきそうな戦術だが、それがつぶされたのは、ある手紙がラングロイス判事に届いたため。こんなタレコミの手紙を書く奴は一体誰？そりゃきっと、トムに嫉妬心を燃やすウィスリー？ジェインはそう考えたが、実は・・・？

そんな思いがけない破綻が訪れると、やはり度胸が据わるのは女で、オロオロとだらしがないのが男と相場が決まっている。つまりトムは「僕の全生活は大叔父に委ねられている。大叔父から見捨てられたら生きていけない」と発言して、何とジェインよりも大叔父の方を選択したわけだ。そうなりゃジェインだって「さよなら」と言わざるをえないから、これにて2人の恋はジ・エンド。誰でもそう思うし、ジェインは以降ハンブシャーに戻り、後はウィスリーとの結婚を待つばかり？そんな状況下で、再びトムがジェインの元を訪れ、急遽駆け落ちの実行となったわけだが、さてその利害得失は？

ジェインの決意を知った姉のカassandra(アンナ・マックスウェル・マーティン)は、絶対そんなことはダメだと諭したが、今のジェインを止めることができるものなんてあるはずがない。馬車に飛び乗った2人は一時の幸福な時間を過ごしたが・・・。

ジェイン・オースティン文学の真髄は？

『分別と多感』『高慢と偏見』『エマ』などジェイン・オースティンの恋愛小説は次々と映画化されているが、それはなぜ？それは、若い女性が自分の想像力だけで書いた恋愛小説とは思えないほど、これらの小説は女性の心理を巧みに描写しているからだ。それはキーラ・ナイトレイが主演した『プライドと偏見』(05年)の映画を観てもよくわかる。

他方、見逃せないのは、ジェイン・オースティンの恋愛文学は私に言わせれば正攻法で、『トム・ジョーンズ』のように墮落的でないこと。つまり私の独断と偏見によれば、良くも悪くもジェイン・オースティンは真面目で優秀なモノ書きなのだ。しかして本作にはそんな彼女の生き方や価値観が明確に表現されているから、それに注目！その言葉は「家族を犠牲にする愛はもろい」というもの。彼女の表現によると、そんな愛は「少しずつ罪悪感と後悔に蝕まれていく」らしいが、さてそんな言葉についてのあなたの考え方は？しかして、この言葉は映画のどのシーンで登場するの？それはきっとあのシーン・・・。

1775年に生まれたジェイン・オースティンは全6作の長編小説を残して1817年

に41歳で没したが、生涯独身を貫いたからすごい。あの時代の女性の生き方には今とは全然違う大きな制約があったはずだが、そんな時代状況の中で、トムとの一度きりの恋を思い出として、生涯恋愛小説を書き続けたジェイン・オースティンに拍手！

2009(平成21)年11月27日記

「男は顔じゃない！」は過去のものに？

1)私が弁護士登録した1974(昭和49)年は、各地で大規模公害訴訟が闘われていた時代。その頃は裁判所に公害による損害賠償を認めてもらうのは大変だった。他方、私は登録以来今日まで36年間一貫して交通事故の損害賠償事件を示談、訴訟問わず扱っているが、こちらは「基準」があるから楽なもの。基準には自賠償基準、任意保険基準、裁判所基準の3つがあるから、二木雄策氏が『交通死』(1997年・岩波新書)で批判したように、命の価値にははっきりと差があり、それを明示したメニューがあるわけだ。たとえば男と女の収入の差は賃金センサスを見れば明らか。また大学出と中卒では年収の差は明らかだから、死亡した場合の逸失利益に大きな差がつくのは当然だ。

2)このように、同じ交通事故でも被害者が女性の場合は請求できる額が低くなる傾向が強い。その例外が顔の醜状痕。すなわち、交通事故の後遺障害として顔面に醜状痕が残った場合、外貌に単なる「醜状を残すもの」については、女子は12級で男子は14級。そして「著しい醜状を残すもの」については、女子は7級で男子は12級。このように女性の「優位」は明らかだった。

3)それに風穴をあけたのが、顔などに著しい傷が残った際の労災補償で、男性よりも女性に高い障害等級を認めているのは違憲だとして、国に障害補償給付処分の取り消しを求めた訴訟で、京都地裁が去る5月27日に下した「合理的な理由なく性別による差別的扱いをしており、憲法14条に違反する」との判決。性差別を理由に障害等級を違憲とした判決ははじめて。「著しい外見の障害についてだけ、男女の性別で大きな差が設けられているのは不合理」というわけだ。醜状痕について性差を認めるのは「顔のやけどなどの障害で受ける精神的苦痛は、女性の方が男性より大きい」という社会通念」だったが、国側のそんな主張は「具体的根拠に乏しい」と排斥された。国(厚労省労働基準局労災補償部補償課)は控訴したから、この判決が確定するかどうか注目したい。

4)イケメン全盛時代の今、イケメン男子にとっては朗報だが、今なお「男は顔じゃない！」とのたまうおじさんたちは、この判決をどう受けとめる？

2010年(平成22)年6月 日記